

企画展「涅槃図の世界」目録

期間 二〇一五年二月九日～四月四日
場所 古典芸能研究センター二階展示室

二月十五日は釈迦の入滅した日、涅槃会である。仏教寺院において大切な日である涅槃会では、『大般涅槃経』『摩訶摩耶経』等に基づいて釈迦入滅の場を描いた「涅槃図」を掛けて、供養が行われてきた。各寺院の必需品であった「涅槃図」の需要は極めて高く、早くから木版印刷されたようである。また、釈迦の一代記ともいえる読み物『釈迦の本地』でも、釈迦の涅槃が最後のクライマックスとして語られ、挿絵に涅槃図が描かれていく。「涅槃図」は人々にとってよく知られた図であったことから、そのパロディとも言える「見立て涅槃図」が生まれてくる。例えば法然や日蓮など高僧の涅槃図、近世になると、野菜や鯨などの涅槃図、死んだ役者を悼む浮世絵（死絵）にも涅槃図を摸したものが見れる。

センター所蔵の志水文庫の中の大きな割合を占める仏教版画にも、釈迦の涅槃図とそれに基づく様々な変わり涅槃図がある。二〇一五年一月二十四日より横尾忠則現代美術館で開催された「横尾忠則 大涅槃展」に、志水文庫の涅槃図八点を貸し出したことを契機に、センターでも、志水文庫の涅槃図を中心に他の涅槃図に関連する資料を配した企画展「涅槃図の世界」を開催することとした。

日本には、涅槃図がたくさん現存し、特に木版の涅槃図は無数

にあるといつてよい。同じ釈迦の涅槃の様子を描いた涅槃図でも、それぞれに描き方が異なっており、その違いを確かめるのも涅槃図を見る一つの楽しみと言える。描き方の違いで涅槃図を二つの様式に分類したのは、中野玄三氏であった。氏は、京都国立博物館で昭和53年に行われた「特別陳列 涅槃図の名作」の図録解題で、釈迦を画面中心に大きく描き、釈迦の足元から見た構図のもと、釈迦を比較的小さく描き、涅槃に集まった人々（五十二衆）や動物たちの悲嘆の様子を詳しく描いたものに分け、前者は平安時代から鎌倉時代初期の制作、後者は鎌倉時代になって新たに現れた構図であるとされた。

竹林史博氏は『涅槃図物語』（大法輪閣）で、いくつかの涅槃図の構図の違いをあげられている。例えば、涅槃に集まった五十二衆の名前が書かれているものと書かれていないものや、集まった動物の中に猫が描かれているものと描かれていないものなど。そして、涅槃に入った釈迦の右手がどのように描かれているかで三つに分類が出来る事を指摘されている。一つ目は、仰向け（あるいは少し右を向いて）横たわり、両手を真つ直ぐに伸ばした姿で描かれているもので、これは古い形式を踏襲している。二つ目は、横臥して右手を曲げて顔の前に置いているもの、三つ目

は、やはり横臥して、右手で手枕をしているものである。この最後の形式が、近世の涅槃図では一番多く見られる。志水文庫の涅槃図版画では、こうした全ての形式を網羅してはいないが、いくつかの違った描き方を見ることができる。

氏は又、近世の木版涅槃図は、明兆型と道益型に分けることもできると指摘されている。明兆とは、室町時代の画僧で、東福寺にある巨大な涅槃図を描いた画僧である。明兆による東福寺の涅槃図を基にした木版画群が明兆型となる（目録番号11から13）。一方、道益は近世中期に活躍した絵師であるが、その詳細はわからない。近世後期に版行された涅槃図の多くは、この道益による涅槃図を基にしている（目録番号10）。明兆型と道益型は、五十二衆の一人で阿難尊者（彼はどの涅槃図でも釈迦の横たわる宝床の前で倒れ伏していますのですぐわかる）の近くで泣き伏している人物が、日光長者であるか純陀であるかで、識別ができる。

1 釈迦涅槃図

紙本墨摺 筆彩 一幅 近世初期

小巻法華経の見返し絵として付されていたものを軸装に仕立ててある。この他に、見返し絵に涅槃図を描いた小巻法華経を志水文庫では二点所蔵する。

本図は、小さな画面の中に、沙羅双樹の下の釈迦を囲んで悲泣する諸菩薩・仏弟子や鳥獸、飛来する生母摩耶夫人、枕もとの釈迦の錫杖と鉢の包み等の、涅槃図に必須のモチーフを描き込み丁寧に彩色が施されている。

表装の裏裡に「開眼主本門正流末葉両寶山十九世日秀（花押）」

南無妙法蓮華経 日逢（花押）」とある文書が貼られている。

2 釈迦涅槃図

紙本木版彩色 一枚

豆涅槃図。「涅槃古版画集」に類似のものが載っており、解説には「御守として一つの要素を備へてゐる」とある。

3 涅槃曼荼羅（佛垂般涅槃略説教誡経扉絵）

紙本墨摺 一幅

「佛垂般涅槃略説教誡経」は、別名「佛遺教経」ともいう。釈迦の入滅の際、集まった弟子達に釈迦が説いた最後の教えを記したお経である。扉絵に「涅槃曼荼羅」として涅槃図が描かれていることがある。

3は、扉絵部分を軸装に仕立てたもの。「涅槃古版画集」には正徳六年版『佛垂般涅槃略説教誡経』の扉絵の図版が載るが、3はそれと同版である。4とは異なり、涅槃に集まった動物たちが多数描かれている。

4 佛垂般涅槃略説教誡経

折本 版本 一帖

巻末に「勢州 宝泉禅寺 廣観校正」とある。「涅槃古版画集」には、これと同版の『佛垂般涅槃略説教誡経』について解説があり、本書にはないが、版元が「京都六角通柳枝軒」であることが分かる。涅槃図には、釈迦の涅槃に集まった五十二衆の名が詳細に記されている。描かれている動物は獅子のみである。

5 釈迦涅槃図

紙本墨摺 筆彩 一幅

釈迦の涅槃に参集した五十二衆の名前が、詳しく書き込まれている涅槃図。

釈迦が横たわる宝床の周囲には沙羅双樹が八本描かれている。この八本の沙羅双樹は、涅槃四徳と四顛倒に喩えられるが、本図ではそれぞれの木にその喩えるところが記されている。すなわち四徳を現す「西双が（我）」「南双らく（楽）」「東双しやう（常）」「北双しやう（浄）」と四顛倒を現す「西双むが（無我）」「南双く（苦）」「東双むしやう（無常）」「北双ふしやう（不浄）」である。

6 弘法大師座像・釈迦涅槃図

紙本墨摺 筆彩 一幅

二枚の図を一軸に仕立ててある。上の図は、上段に大日如来を描き、周囲に光明真言を梵字で記し、下段に弘法大師の姿を描く。下の図が涅槃図。

同版ではないが、『涅槃古版画集』に載る一図と構図の点で類似する。特に、倒れ伏す阿難の右下に、仰向けに倒れて嘆き悲しむ金剛力士が描かれているが、同様の描き方をした図は、『涅槃古版画集』では一例しかみつからない。

7 釈迦涅槃図

紙本合羽摺彩色 原装 一幅

釈迦の周囲に集まった人々の配置等は、涅槃図によって千差万

別であるが、釈迦の足下で嘆く老女が、沙羅双樹より手前に描かれる例は少ないらしい。7・8・9はいずれも、老女の位置が沙羅双樹より手前である。7はまた、畳んだ衣を頭に敷き手枕をする釈迦の姿が描かれている点も、特徴的である。

『涅槃古版画集』には、文政頃の版であるという涅槃図とその後摺二種が載っているが、7の涅槃図もその同種。

8 釈迦涅槃図

紙本墨摺 筆彩 一幅

『涅槃古版画集』に載る西村版の涅槃図とかなり近似している。ただし、詳細に比較すると、相違点も少なからずある。特に、上方の天の様子と下方の動物たちの様子に相違が見られる。本図は幕末あるいは明治初期のものと考えられ、西村版の後刻かもしれない。

9 釈迦涅槃図

紙本色摺 一幅

明治期の色摺り。8と構図が似通う。

10 阿弥陀如来来迎図・釈迦涅槃図・

地藏尊図・春日明神図

紙本墨摺 一幅

三枚の刷り物と「南無阿弥陀仏」の名号を一軸に仕立てたもの。一番上は、阿弥陀如来の来迎図で、「弘化乙巳夏楽山印施」と記されている。

真ん中が涅槃図。図の下に「撰州勝尾寺滝谷神呪院祐瑞敬施

嘉永二酉七月仏歎喜日 敬刻 画工森田」と記されており、いわゆる勝尾寺版の涅槃図である。釈迦の涅槃に集まった五十二衆の名前が、漢字で記されているが、阿難の右下に居る人物が「純陀長者」とあるので、道益型の涅槃図である。

一番下は、左端が童子姿の春日明神、残りの二図は地蔵尊である。中央の地蔵尊の下には「大安寺」と書かれている。その姿は、現在奈良市大安寺町の地蔵堂に祀られている地蔵尊と似通っている。

11・12・13 東福寺釈迦涅槃像

11 紙本墨摺 筆彩 一幅

12 紙本墨摺 筆彩 一幅

13 紙本墨摺 一枚

京都の東福寺には、京都三大涅槃図（東福寺蔵、明兆画・泉浦寺蔵、狩野松榮画・本法寺蔵、長谷川等伯画）の一つと言われる大涅槃図（縦約12^{1/2}尺、横約6^{1/2}尺）がある。この涅槃図は室町時代の画僧、吉山明兆（明兆殿司）によって応永十五年に描かれたもので、他の涅槃図には描かれていない猫が描かれていることでも有名である。

東福寺の涅槃図を模写した木版画は、江戸時代に度々版行され、かなりの数の異版が存在している。ここに展示した三点の内では、12と13は同版と思われる、11は12や13より古い版らしい。11は『涅槃古版画集』の解説から、文政頃の版と推測される。12は墨摺木

版に彩色を施し軸装にしたもので江戸末から明治初期頃の版。13は版面の様子から、かなり後摺と考えられる。

（参考）明兆（1335211431）

室町時代の臨済宗の画僧。淡路国津名郡物部庄（現兵庫県洲本市物部）出身。淡路の安国寺で修行をし、後に京都の東福寺に入る。禅僧としての高位を望まれながらも、一生を画僧として過ごした。僧としての位が仏殿の管理を務める殿司の位にあったので、兆殿司（明兆殿司）と称された。享年八十。東福寺には涅槃図以外にも彼の絵画が残る。

14 善光寺釈迦涅槃像図

紙本墨刷 一紙 江戸中期か

信州善光寺世尊院釈迦堂の本尊は、鎌倉時代に作られたといわれる等身大の涅槃仏である。その姿を写した木版が、『涅槃古版画集』に載っているが、本図はその異版。

図の右横に「越州古多浜出現世尊涅槃之尊像奉安置」と書かれているが、善光寺の涅槃仏は、越後国古多賀浜に漂着した流木の中から出て来たという伝説があり、それに基づいた記述。

15 釈迦涅槃図

紙本墨摺 筆彩 一幅

14同様、釈迦の涅槃の姿のみを記した版画。墨摺で、釈迦の体にはみ金泥の彩色が施されている。これは涅槃に入った釈迦が、金色に輝いたとある經典に基づく表現である。涅槃に入った釈迦については、例えば『釈迦の本地』では、次のように記されている。

さて、七ほうの座にざし給ひて、百ふくしやうごんの、御手をのへ、御身にちやくし給へるところの、御衣をぬぎさげ給ひて、しまこんじきの御はたへを、あらはし給へり、(中略) かるかゆへに、我最後にあへり、けんすてにつきて、今まさに、涅槃に入なんとす、なんじら眞實をもつて、しまわうごんの、ごしきの身をみよ

(傍線著者 25橋源右衛門刊『釈迦の本地』より)

涅槃図の下には、「朝泉寺 談義 寂誉上人 千座 供養佛」と記されている。「朝泉寺」は東京都文京区本駒込にある増上山三行院潮泉寺のこと。潮泉寺は浄土宗寺院で、芝増上寺の末寺であった。開山は照蓮社寂誉上人(寛文三年寂)と伝えられている。本尊は善光寺如来である。

16 法然上人入滅図

紙本墨摺 一幅

建暦二年、京都東山で亡くなった法然上人の入滅の図。合掌して横臥する法然の周囲で、その死を嘆き悲しむ在俗の弟子達の姿を描く。その構図は釈迦の涅槃図を意識して描かれたものと考えられる。上部には法然の「一枚起請文」が書かれている。高僧の入滅の図を釈迦の涅槃図に見立てて描いたものには、ほかに日蓮聖人の涅槃図が有名である。

「京松原西寺町西照寺顔阿印施也」とあるが、「顔阿」は西照寺十四世の住職転蓮社輪誉上人顔阿和悦昌柳和尚のことらしい。顔阿は、安永八年に西照寺に入寺、寛政七年隱居、文化十年遷化しているの、寛政頃の図と推測される。

17 璃寛像黄泉発足

紙本墨摺 一枚

璃寛は、初代嵐橋三郎(二代目嵐吉三郎)の俳名。明和六年(1769)、初代嵐吉三郎の三男として生まれる。幼時に大坂の竹田芝居に出た後、京都で修行を重ね、上方を代表する立役として活躍をする。文政四年(1881)橋三郎と改名、その後間もない同年九月二十七日に五十四歳で没する。「第一美男で其上美声にて上品で、まづ近世の稀人なり」と評された役者で、当時江戸と上方で活躍していた三代目中村歌右衛門(芝翫)と人気を競った。

「璃寛像黄泉発足」は、いわゆる死絵である。絵師は有楽齋長秀。烏帽子をかぶった武将の扮装で横臥する璃寛を、作者奈河晴助や仲間たちが取り囲み、璃寛の戒名、辞世の句、追福の句などが記されている。璃寛のこの扮装は、最後の役であった源頼政の扮装であろうか。釈迦の涅槃図では虚空に摩耶夫人が描かれるが、本図では天満天神や祇園の神や伝教大師が描かれている。

璃寛の死絵には、この絵と同様に涅槃図に見立てたものが他にもある。しかし本図の特異な点は、「りくはんのこうぶつわかれをおしむ(璃寛の好物別れを惜しむ)」と記される通り、水からくり・菊細工・祇園すもう・大矢数・色町町中女中などが、璃寛ゆかりの人々と共に彼を取り囲んで、その死を嘆いている所にある。よく見れば、そこには「坂東三津五郎の幽霊」まで描かれているのである。

長秀画と並べて「洛東じやまく才作」とあるのはおそらく長秀の戯名であろう。

(参考) 長秀

有楽斎長秀。生没年未詳。京都の浮世絵師で、寛政年間後期から活躍しだしたと考えられる。活躍期間は長く、合羽摺の役者絵、小版墨摺の役者絵、練り物図、錦絵など多種多様な作品が残る。

18 (参考) 清谷画風璃寛像

一軸 肉筆

京都の絵師清谷による風璃寛(初代風橋三郎・二代風吉三郎)の姿絵。璃寛が扮しているのは、手にもつ笠に「十」の文字が見えることから、『伊賀越道中双六』の呉服屋十兵衛の役である。

賛は橋九二介。

詫好の濃茶薄茶に望なき たをやめ達のひくは璃寛茶

西光亭芝国に、璃寛の橋三郎襲名に際しその当たり役を懐古的に描いた錦絵があるが、そこにも呉服屋十兵衛に扮した璃寛の、鏡に映った姿が描かれている。

(参考) 清谷

文化から文政頃にかけて活躍した京都の絵師。合羽摺役者絵が多数残る。風璃寛を描いた木版墨摺役者絵が数点ある。

19 中村歌右衛門死絵

横大判錦絵 二枚続き

右上に、「中村歌右衛門三代目」とあるが、実際は四代目中村歌右衛門の死絵。

四代目中村歌右衛門は、寛政十年江戸の生まれ。俳名翫雀。藤

間勘十郎の養子となるが、文化五年に三代目中村歌右衛門が江戸へ下ってきた折に弟子となり、中村藤太郎、後に中村鶴助と名乗る。文政八年二代目芝翫襲名、天保七年四代目歌右衛門襲名。江戸と上方の双方で活躍する。風姿にすぐれて三代目同様実悪から女形まで幅広い役を演じた。嘉永五年二月十七日没。

歌右衛門の涅槃図仕立ての死絵は他にもあるが、本版画の構図は背丈が高く堂々とした風采であったありし日の歌右衛門を偲ばせるものである。取り囲むのはその死を嘆く近親の者たちである。残念ながら、二枚続きの左側の左半分が切られている。二枚が完全な形で揃っている早稲田大学演劇博物館蔵の錦絵を確認すると、横たわる歌右衛門の枕元にも更に多くの人が描かれている。また、酔放散人写という落款もあるらしい。

20 狂歌二翁集

刊本 一冊(下巻欠)

享和三年、桃縁斎貞佐(芥河貞佐)二十五年忌、玉雲斎貞右十三年忌の追善として、蝙蝠軒魚丸によって編纂された狂歌集。

志水文庫蔵の『狂歌二翁集』は、上巻のみ。国文学研究資料館に上下巻合冊の本が所蔵されており、それによって成立事情等が知れる。国文学研究室本にも刊記はなく、蝙蝠軒魚丸の跋文に「享保三年癸亥春」とある。冒頭に玉雲斎の「試筆自画賛」と桃縁斎の「鯨涅槃并花見鯛之記」があり、後者の後ろに鯨を涅槃図に見立てた絵が載る。

鯨涅槃并花見鯛之記

桃縁斎述

過し明和二の年冬十二月、世を嗣子に譲りて、隠居の身とな

りぬ。同し三の年如月望は仏滅日なれば、予も彼御跡をした
ひ此世をさりぬと思ひて、鬢髪を剃除し京浪花尾州の智音の
もとに遠行を告ぬれば、吊の文追悼の夷曲なとたまふこそい
とおかしけれ。其日より卯月初の八日まで、弊庵に閉籠りて
世間を見ず。此日又御仏の降誕をまなひ、薬湯など浴してこ
の世界へ更に生れ出し心もて、又生庵と改号し、前世の礼交
ことくく廃しぬ。よて、つたなき狂哥し侍るのみ。

21 籠細工假寝姿当振舞絵からくり

紙本色摺 一枚

文政二年二月、大坂四天王寺で聖徳太子千二百年忌法事と、諸
堂靈宝の開帳が行われ、二月二十二日から天王寺西門石の鳥居の
北で、細工師一田庄七郎による籠細工「天竺僧假寝姿」の興行が
行われた（『撰陽奇観』・『雲錦隨筆』・『藤岡屋日記』・『浪華百事談』
など）。かなり評判になったらしく、この見世物に関する刷り物
等が複数残っている。

本図もその籠細工「天竺僧假寝姿」の興行関連の刷り物の一つ
である。「いづれも合印にあはせはるなり」とあり、線に沿って
切ったり折ったり貼ったりして、籠細工とそれを見る人々の様子
を立体に作ることができるらしい。各細工物は、『撰陽奇観』に
載る絵本番付「天竺僧假寝姿」に描かれている諸々の細工物とは
ほぼ一致する。

北浄画 籠細工人一田正七郎 口上方連名

大坂西よこぼり長浜町はりまや五郎□□

いづれも合印にあはせはるなり

大坂御霊筋瓦町北入和泉屋卯作板

「文政二卯年三月より四天王寺開帳の見せもの」と書写

22 釈迦一代伝記（釈迦一代伝記鼓吹）

刊本 大本八冊 元禄五年洛陽書林田中庄兵衛刊

序文に、「洛下貞上人」とあり、元禄頃の真宗仏光寺派の僧、
玄貞の著述と推定される。一説には浅井了以の著述とも言う。貞
享元年（一六八四）完成、元禄五年（一六九二）、渡辺十郎兵衛・
田中庄兵衛より刊行。

内容は、「釈迦の入胎から入滅までを八相誠道の伝記につき、
和文で平易に解説したもの」（『日本古典文学大辞典』）で、その
執筆態度について、黒部通善氏は「釈迦一代伝記鼓吹（翻刻）」（『愛
知学院大学教養部紀要』第40巻第1号において、「娯楽性のつよ
い仏伝物語に反発して仏伝文学を仏伝経典にそくしたもののにもど
そうと試み」たものであり、「仏伝経典にもとづいた正統な仏伝
の世に行われることを願って」の執筆であったとされる。著作の
目的は凡例挙要に次のように記されている。

必ず博学多才ノ人ノタメニアラズ。唯ナガフトコロハ、浅学
ノモノ、見ヤスク、在家ノトモガラノ、アキラメヤスクシテ
（中略）仏道ヲ修行セシメントメナリ

23 涅槃像考文抄

刊本 大本一冊 茶色無地表紙 専念寺の蔵書印

五十三丁（内、四十四丁から『涅槃像一座談』）

涅槃像に関する解説書で、近世の僧袋中の著述。ただし、本書

のどこにも、著者の名は記されていない。伝記資料から、寛永頃の袋中の著述と考えられている。

上人一代の制作。(中略)四十二章経注一卷、涅槃考文鈔一卷、泥?之道一卷、彌陀偈抄一卷、五百誓願記三卷、舍利禮文記は、瓶原にて記るせり (『袋中上人伝』)

上人七十二歳の冬、城州相楽郡西尾九鉢佛の邊に住居し給ひけるに、同郡瓶原といふ所に天神の宮あり。寛永元年正月廿五日より、上人一七日の間参籠ありけるに、和光の方便にや、此社のわたりに草庵をむすび、朝夕神に詣で、法味を捧げばやとおぼしければ、黒田新蔵といふ有信の人きゝて、やがて此山陰の木だちもいよやかなる處をゑらびて、庵蘆を経営して、日々に供養の物なんどちてはこびけり。今の瓶原心光庵これなり。(『袋中上人伝』)

刊本のみが現存しており、稿本の存在は不明である。版元・刊年不明。末尾に『涅槃像一座談』を付載。多くの解説書で、『涅槃像考文抄』は『涅槃像一座談』合綴されているとあるが、丁付けは通しになっており、刊本は当初から『涅槃像考文抄』と『涅槃像一座談』を合わせた形で出版されたと考えられる。

内容は、「釈尊入滅後の事歴を明にし、涅槃像の考証に供する為に、諸経文から引用し、恣意を加へて解釈したもの」(『琉球神道記』「大衆上人著述目録並解題」より)である。また、末尾の『涅槃像一座談』は、「考文抄を意抄して、通俗平易に、和文を以て、謂はゞ一座談的に、涅槃像の解説を述べたもの」(『琉球神道記』「大衆上人著述目録並解題」より)である。

24 涅槃像随文略賛

刊本 大本三冊 京都書林永田調兵衛刊 刊年不明

享保十八年九月貞極の跋文 宝暦七年二月了山・貞雅の跋文 宝暦七年冬了山跋文

貞極口述、了山・貞雅筆授による、釈迦の涅槃并涅槃像に関する解説書。

涅槃図に猫が描かれない事について、俗説が蔓延り、僧侶もそれを訂正しないと嘆き、自分は絵師に命じて、猫を描かせたという記述がある。

(参考) 貞極 (1677-1756)

四休庵貞極。法名一蓮社立誓。延宝五年生まれ、宝暦六年死去。浄土宗の僧侶。

25・26・27 釈迦の本地

御伽草子。「釈迦出世本懐伝記」「釈迦物語」とも。室町時代成立か。【内容】前生譚からその生涯と、阿難の經典結集までの釈迦の伝記。(中略)各プロットは正統の仏典や本朝の仏教説話集所載のものと同相違を見せ、おそらく説法唱導の場で語られてきたものの集約らしく、後半の転法輪の部分は諸本により異なつた教義を強調する。(『日本古典文学大辞典』(岩波書店)より)

写本は、天理図書館・彰考館・岩瀬文庫・東洋文庫等・大英博物館等が所蔵する。古活字本は、国会図書館・天理図書館・大東急記念文庫等が所蔵するが、全巻揃いは現存しない。板本は、後に示すように多数の版が現存する。

25 寛永二十年橘屋源兵衛板本 大本三冊

26 寛文二年版吉野屋権兵衛板同版無刊記本 大本三冊

27 桑原半蔵板本 大本一冊(上中欠)

○寛永二十年橘屋源兵衛板本

寛永二十年九月吉日 橘屋源兵衛開板 上中下大本三冊 十一行 挿絵ナシ

○慶安元年板本

慶安元年霜月吉日開板 上中下大本三冊 十一行 挿絵ナシ
寛永二十年板の後刷本

○明暦頃山田市郎兵衛乱板本

山田市郎兵衛開板 上中下大本三冊(三冊揃いで所蔵するところはない) 十一・十二・十三行 挿絵アリ

十一行部分は寛永二十年板の板木を利用、十二行部分は改刻、十三行部分は新たな板木。新たに挿絵を挿入する為、寛永二十年板に新たな板木を加えた乱板

○明暦二年板丹緑本

明暦二年初春吉日開板 中下大本二冊 十三行 挿絵アリ

寛永二十年板の本文を利用。ただし、板木はすべて新刻

○寛文二年吉野屋権兵衛板本

寛文二年仲秋上旬 馬場馬場二条下町 吉野屋権兵衛板 上中下大本合一冊 十三行 挿絵アリ 明暦二年板の後刷本

○寛文板同板無刊記本

刊記ナシ 上中下大本三冊 十三行 挿絵アリ 寛文二年板の後刷本 ただし、いずれの本も、下巻の二十一丁二十二丁が欠

○寛文十年本問屋板本

寛文十年正月吉日 通油町 本問屋開板 上中下大本合一冊

十四行 挿絵アリ 「寛文十年」部分を削った後刷本(下巻一冊)がある

○和泉屋庄次郎板本

浅草新寺町 書林 和泉屋庄次郎 上中下大本三冊 十四・十五・十六行 挿絵アリ

○桑村半蔵板本

浅草觀世音裏御門通 書林 桑村半蔵 上中下大本三冊 十四・十五・十六行 挿絵アリ 和泉屋庄次郎板本の求板本

28 しゃかの本地(説経)

刊本 黒無地表紙 半紙本一冊 六段本

大傳馬三町目うろこかたや孫兵衛板

阪大赤木文庫本と同版の天満八太夫正本。節付け部分に「七太夫」「梅太夫」の名が記されている。『説経正本集』第一の解題の一部を以下に記しておく。

内容は中世より読物として行はれたものと大差はない。唯、詞章が簡単になり、筋の運びが早くなつて来てゐる事と、僅に金平風が入つてゐる事と、節附の中に、七大夫、梅大夫とある事に注意したい。本書は刊行年月がないが、挿絵の画風と、板式から、水谷さんは宝永ごろの刊行と推定された。尚、挿絵は鳥居清信である。

29 釈迦八相物語

刊本 大本八卷五冊 紺無地表紙

寛文六年 心齋橋筋伊丹屋善兵衛・通通塩屋平助刊

仮名草子。作者未詳。【内容】釈迦が一代に示した八相(降兜率・入胎・住胎・出胎・出家・成道・転法輪・入滅)を中心にその生涯を描く。前半では、摩耶夫人の受胎とその姉・曇弥の嫉妬調伏、太子の誕生と摩耶夫人の臨終という劇的場面があり、後半では出家後の釈迦が悪魔をしりぞけ迫害に耐えながら弘法する力強い姿が描かれ、質量ともに当時におけるすぐれた伝記物語である。

(『日本古典文学大辞典』より)

【涅槃図に描かれる動物】

釈迦の涅槃に際して集まったのは、五十二衆だけではない。様々な動物(鳥・虫も含む)もまた釈迦の元に集まり、その入滅を嘆いた。『大般涅槃経』には「龍・金翅鳥・象・獅子・鳧・鴉・鴛鴦・孔雀・乾闥婆鳥・迦蘭陀鳥・鳩鵲・鸚鵡・俱翅羅鳥・婆嚩伽鳥・迦陵頻伽鳥・耆婆耆婆鳥・水牛・牛・羊・蜂・毒蛇・蜚蜋・蝮・蝎」が集まったと書かれている。

日本で見える涅槃図の多くは、図の下方に、様々な動物を描いている。しかし、インドや中国の涅槃像には動物がないものも多いらしい。日本でも古い涅槃図(涅槃像)も同様であった(展示No.4のように獅子のみが描かれるものはあった)。

日本では、時代が下るにつれて、涅槃図の下部に描かれる動物の数が増加していく。増加したのは、『大般涅槃経』に書かれる空想上の動物ではなく、実際にいる動物であった。描かれる動物の種類・描く位置・姿は、涅槃図によって千差万別であり、同じように見えていながら、微妙に異なる点が多数ある。

涅槃図には猫が描かれないという。これについては、展示No.24

『涅槃像随文略讚』に、猫を涅槃図に描かないと云う事に関する筆者の見解が記されている。一方で、あえて猫を描いた涅槃図というのは、それゆえに有名になっている。特に明兆が描いた東福寺の大涅槃図には、猫が描かれている事で有名である。東福寺の涅槃図を写した木版画(展示No.11・12・13)でも当然猫の姿をみることができ、それ以外にも猫と思われる動物の姿を涅槃図のいくつかで見ることが、実はできるのである。

(川端咲子)

【参考文献】

- 『涅槃古版画集』(平塚運一著 彰国社 一九四二)
- 『特別陳列 涅槃図の名作』(京都国立博物館編 一九七八)
- 『涅槃会の研究』(元興寺文化財研究所 一九八二)
- 『変り涅槃図考』(信多純一著 平凡社『にせ物語絵 絵と文・文と絵』一九九五所収)
- 『よくわかる 絵解き涅槃図』(竹林史博著 青山社 二〇〇八)
- 『涅槃図物語』(竹林史博著 大法輪閣 二〇一三)

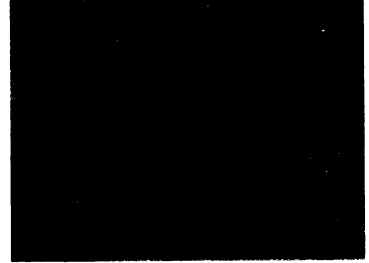
※企画展「涅槃図の世界」で展示した志水文庫蔵の涅槃図はすべて、古典芸能研究センターホームページ内で公開している。



13 図の猫



11 図の猫



6 図の猫



12 図の猫



10 図の猫

【追加】横尾忠則現代美術館「大涅槃展」出品品

- 1 小巻法華経 二巻
扉絵に涅槃図が描かれた法華経。縦7.5センチ程の小巻である。
- 2 釈迦涅槃図 紙本墨摺 筆彩 一幅
正保三年極月吉日 室町通鯉山之町小島弥左衛門開版の涅槃図と同版。
- 4 釈迦涅槃図 紙本墨摺 一幅
元文五年 京都書林河南四郎右衛門版、文政二年 播磨屋五郎兵衛求板の涅槃図。五十二衆の名が片仮名で書き込まれている。
- 5 芭蕉翁臨滅度之図 紙本墨摺 一幅
木母寺にある石碑を正面摺にしたもの。石碑の元になった図は、曙山こと二代目澤村田之助が所蔵していたという。絵師は恵斎。
- 6 三世中村芝翫涅槃図 紙本色摺 一枚
弘化四年十一月二日に没した三世中村芝翫の死絵。大判縦長の錦絵で、上段に芝翫の口上、中央に伏す芝翫の周囲には夥しい数の関係者が描かれ、一人ずつ名前が記されている。
- 7 八代目市川團十郎涅槃図 錦絵 一枚
嘉永七年八月六日に大坂で自刃した八代目市川團十郎の死絵。團十郎の錦絵や関連書を手にして、嘆き悲しむ鼻肩の娘たちが前には描かれ、背後には父七代目團十郎の姿がある。
- 8 西郷隆盛涅槃図 紙本色摺 錦絵二枚続き
明治十年西南戦争で没した西郷隆盛を悼んで出された一種の死絵。須田町長嶋辰五郎画 小舟町熊谷庄七出版